

目次

第一章	肥後萬葉歌新考	3
一	長田王の水島・野坂の浦歌	4
二	熊凝のためにその志を述ぶる歌	20
三	笠女郎の託馬野歌他	32
第二章	長瀬真幸書入萬葉和歌集の研究	39
一	「長瀬真幸書入萬葉和歌集」解説	39
二	本書における「真幸書入」の実態	57
第三章	長瀬真幸書入萬葉和歌集卷一	123
	あとがき	208

方の風習を熟知する者の作であろう。でなくては「肥人の額髪結へる」と第三者的表現を取るはずがない。

「額髪結へる染木綿」は「額の前髪を括り上げている色染めの木綿布」のことであるが、魏志倭人伝にも「其の風俗は淫ならず。男子は皆露紵（注「みずら」か）し、木綿を以て頭に招く。其の衣は横幅、但結束して相連ね、略縫ふこと無し。（中略）皆徒跣なり。屋室有り、父母・兄弟は臥息処を異にす。朱丹を以て其の身体を塗ること中国の粉を用ふるが如きなり」（山尾幸久氏『魏志倭人伝』付録I書下し文 講談社現代新書。注記は筆者）とある。三世紀の倭人伝時代の九州一帯の俗習の一部は、なお萬葉時代にも残っていて、球磨人は、前髪を色染めの木綿布でくりあげていたのであろう。ちなみに球磨地方は、古来木綿の名産地であったこと、球磨川の古名が木綿葉川であることも明らかである。

倭人伝には「以朱丹塗其身体」ともあるが、これは魔除けの呪的風習であろうから、色染めの木綿は、朱色で色染めたものだったかと想像される。額髪を覆う朱色の布は、鮮烈な印象を与えたにちがいない。

なお、新潮古典集成頭注は「女の歌であろう。男性的な物に寄せた歌は女の歌、女性的な物に寄せた歌は男の歌という傾向がある」（『萬葉集』巻三、二〇六頁）という。さすれば、球磨地方を直接見聞した大和の女性か、または身近な男性からその風習を聞き知って序歌に利用した女性の歌ということになる。

## 第二章 長瀬真幸書入萬葉和歌集の研究

### 一 「長瀬真幸書入萬葉和歌集」解説

1

表題の萬葉版本は、昭和五十七年夏、玉名市伊倉南方在住の内田善右衛門氏より、熊本県立玉名高校図書館に寄贈されたもので、同氏の話によれば、もともと菊池市木下家（木下韓村家か）から譲り受けたものだそうである。表記裏貼紙（後記）によって、明治十四年四月までは、真幸の子息幸室の許に保管されていた事がわかるが、以後どういう経由で、木下家、内田家に伝わったかは分明でない。

全二十冊本、題箋には萬葉和歌集とあったと思われるが、そのほとんどが剝落している。巻十三と巻十九とは現在欠本となっている。巻二十刊記に「時宝永六丑季春吉辰 御書物屋 出雲寺和泉掾」とあるので、